

編集後記

主題として胃潰瘍の最近の問題点を取りあげたが、その内容は古くして新しい問題といえよう。特に潰瘍の宿命ともいべき再発の問題が最大の論点となっているが、結局のところ、今日なお再発を防ぎうる的確な方法はない。いかに薬を飲んでいても、またいかなる方法をもってしても、再発するものは再発する。このへんに胃潰瘍経過の複雑さと微妙さがある。

本号では、胃潰瘍の再発因子に関する細かい吟味と、その対策、さらに多くの経験例を基にした内科的および外科的治療のあり方と問題点が示されている。一方、小児においても、また老人においても、近年、胃潰瘍が増加しており、それらの発症や経過に、最近の複雑な社会環境的因子、さらにそれに伴う精神的ストレスがかなり密接に関連している点などが指摘されている。

胃潰瘍患者の経過観察や管理のしかたは、最近確かにきめ細かく行なわれるようになった。しかし、それによってどれほど昔に比べ再発率が低くなったかといわれると、返答に困る。将来とも再発を防ぐよい方法を期待するのはむずかしいかもしれない。しかし、これからも何年かごとに今回のようなテーマを取りあげながら、なんとか少しでもこの難問題を解決するよう努力しなければならないと思う。これこそ、この道の研究に志すものの宿命ともいえよう。

本号の症例はいずれも立派なものである。また竹本教授の第16回日本消化器内視鏡学会総会の印象記は実に感銘深い。学会印象記というものの一つの模範を示したものといえる。

<並木正義>

<編集> 早期胃癌研究会